

# 八代集に於ける夢の一考察

村松正明\*

---

## 目次

---

1. はじめに
  2. 『古今和歌集』『後撰和歌集』
  3. 『拾遺和歌集』～『千載和歌集』
  4. 『新古今和歌集』
  5. おわりに
- 

## 1. はじめに

古代人は夢による神や仏のお告げを求め、夢の予言的な機能を信じて将来を占ったりした。『記紀』における夢は人と神々とは交信する回路であり、公的かつ神聖なものであった。ところが『万葉集』から中古の『古今集』、そして中世の『新古今集』へと時代が推移するにつれて、夢の神秘性は特に和歌の世界において徐々に薄れていったと言えよう<sup>1)</sup>。

大岡信氏は「『夢』は一方では『泡沫のごとき現実』を意味し、他方では『現実を超えた永遠的な神秘の世界』を意味する、不思議な魅力をもった多義性の言葉となった。『夢』の語の多義性は、まさに多義的であることによって、宗教的であると同時に美的であるところの無常観にひたされた、日本人の人生観を言い表すのに最も適した言葉のひとつとなった<sup>2)</sup>」と述べている。即ち、夢は現実を超越した世界を意味すると同時に、はかない現実をも意味し、日本人の人生観を表す最適な言葉だと言うのである。また今井正氏は「万葉の夢は童年期、古今は少女期、新古今の夢こそ女盛りの時期と思う<sup>3)</sup>」として、これら三大集の夢の変遷について考察した。

本稿では、夢の歌が『古今集』から『新古今集』までの八代集を通じて如何に変遷していったか、歌の特徴や歌人たちの夢に対する認識、また時代背景などに注目しながら考察しようと思う。まず、八代集の夢の歌の数を部立ごとに整理してみた。

---

\* 鮮文大 schools 副教授 平安文学

1) 西郷信綱は夢の神性が信じられた下限を鎌倉初期としている。（『古代人と夢』平凡社、1972）

2) 大岡信「夢のうたの系譜」（『国文学』学灯社、1970.3）p.46。

3) 今井正「古代和歌における夢-万葉、古今、新古今を辿る-」（『宇部短期大学学術報告』14、宇部短大、1978.1）p.22。

|     | 總數 | 比率   | 春 | 夏 | 秋 | 冬 | 戀  | 雜  | 哀傷 | 羈旅 | 釋教 | 神祇 | その他 |
|-----|----|------|---|---|---|---|----|----|----|----|----|----|-----|
| 古今  | 34 | 3.1% | 1 |   |   |   | 26 | 3  | 3  |    |    |    | 1   |
| 後撰  | 36 | 2.5% | 1 | 3 | 1 |   | 25 | 1  | 5  |    |    |    |     |
| 拾遺  | 24 | 1.8% |   |   |   |   | 16 |    | 3  |    |    |    | 5   |
| 後拾遺 | 17 | 1.4% | 2 |   |   |   | 7  | 4  | 4  |    |    |    |     |
| 金葉  | 12 | 1.7% |   |   | 1 |   | 7  | 4  |    |    |    |    |     |
| 詞花  | 6  | 1.4% |   | 1 |   |   | 3  | 2  |    |    |    |    |     |
| 千載  | 40 | 3.1% | 1 | 2 |   | 2 | 13 | 12 | 3  | 3  | 4  |    |     |
| 新古今 | 79 | 4.0% | 4 | 4 | 5 | 5 | 29 | 13 | 8  | 6  | 3  | 2  |     |

# 總數は「夢」の語が詠み込まれている歌の数である。

比率は歌集の總數に對する夢の歌の總數の比率である。

上の表から次のことが分かる。

1. 八代集の全てにおいて夢は戀部に一番多く、特に『古今集』と『後撰集』の比率が高い。
2. 『拾遺集』から『詞花集』にかけて夢の歌は一時減少したが、『千載集』から再び増加し始めた。
3. 『千載集』では夢の歌が雜歌や釋教歌などの戀歌以外でもかなり入集するようになった。
4. 『新古今集』では夢の歌が四季の部に多く入集するようになった。

戀歌

以下、八代集の夢の歌の変遷について、『古今集』『後撰集』、『拾遺集』～『千載集』、『新古今集』の三段階に分けて辿ってみることにする。なお八代集のテキストは新日本古典文學大系(岩波書店)を用いた。

## 2. 『古今和歌集』『後撰和歌集』

『万葉集』では夢の歌98首のうち72首(73%)が相聞であったが<sup>4)</sup>、『古今集』では34首の夢の歌のうち26首(76%)が戀歌で、『後撰集』でも36首の夢の歌のうち25首(69%)が戀歌となっている。夢は『万葉集』以來の伝統を受け継ぎ、戀歌を中心として詠まれていると言えよう。だが同じ戀歌として詠まれた夢であったとしても、『万葉集』と『古今集』や『後撰集』とではかなりの相違点が見られる。

4) 『万葉集』には98首の夢の歌があり、そのうち72首が相聞である。『万葉集』の夢については「『万葉集』に於ける夢の一考察」(『日本文化學報』17、韓國日本文化學會、2003.5)で論じた。

第一に『万葉集』では実際に見る具体的な夢が詠まれていたが、『古今集』になると観念化・情趣化した夢が詠まれるようになったという点である。夢が観念的な歌語として使われるようになった結果、用途に応じてパターンが生じ、また情趣的に把握されるようになった結果、空想的に美化されるようになったのである。

次の小町や興風の夢の歌などが空想的に美化された適例と言えよう。

うたたねに戀しき人を見てしより夢てふ物は頼みそめてき(戀2-553、小町)  
わびぬればしひて忘れむと思へども夢といふ物ぞ人だのめなる(戀2-569、興風)

万葉人は神に「うけひ」や「手向」などをして戀する人の夢を見ることを祈願し、また「袖反」や「下紐解く」「枕片去る」などの夢見の呪術を行って夢を見ようと努めた。現實に逢えない人にせめて夢の中でも逢おうとしたのであり、それは夢をもう一つの現實として把握し、夢の逢いを現の逢いにも匹敵するものと感じていたからであろう。ところが『古今集』にはそのような呪術的な夢の歌は殆んど見られなくなり<sup>5)</sup>、小町や興風の歌のように、美化された夢に甘美的な憧れや期待を抱くようになったのである。

また夢が観念的な歌語として使われた結果、パターン化した例としては「思ひ寢の夢」「うたた寝の夢」「春の夜の夢」「見はてぬ夢」「夢路」などがある。

「思ひ寢の夢」は、相手を思って寝ると夢に相手を見ることができるといふ古來の俗信に基づく表現で、小町の歌「思つつ寢ればや人の見えつらむ夢としりせば覺めざらましを」(戀2-552)や、躬恒の歌「君をのみ思ひ寢にねし夢なればわが心から見つるなりけり」(戀2-608)などによって生まれた表現と考えられており、『古今集』にはこれら2首だけが入集している。また『後撰集』にも「思ひ寢の夜な夜な夢に逢事をただ片時の現とも哉」(戀3-766、よみ人しらず)と、「思寢の夢といひてもやみなまし中々何に有と知りけん」(戀4-872、よみ人しらず)の2首が入集している<sup>6)</sup>。

「うたた寝の夢」は、はかない逢瀬の象徴として用いられており、『古今集』には先に美化された例としてあげた小町の歌「うたたねに戀しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき」(戀2-553)1首だけである。『後撰集』にも「うたたねの夢許なる逢事を秋の夜すがら思つるかな」(戀5-898、よみ人しらず)1首だけで、うたた寝の短さと秋の夜長を對比しながら孤閨の侘しさが詠まれている<sup>7)</sup>。先の「思ひ寢の夢」が相手に對する強い執心から見る夢であるのに対して、「うたた寝の夢」は「あまり期待もせず見る夢、それだけにはかない夢」<sup>8)</sup>であると言えよう。

「春の夜の夢」は、短くはかないことの喩えとして詠まれているが、はかなさを描寫する季節としては春の朧とした雰圍氣が最も似合っていると見えよう。『古今集』には全く見られず、『後撰集』に3首入集している<sup>9)</sup>。「寢られぬをしひてわが寢る春の夜の夢をうつつになすよしも哉」(春中-76、

5) 夢見の呪術の歌として、小町の歌「いとせめて戀しき時はうばたまの夜の衣を返してぞ着る」(戀2-554)だけが見られる。

6) 他の八代集には『千載集』に3首(41、765、898)、『新古今集』に1首(240)ある。

7) 他の八代集には、『後拾遺集』に1首(564)、『金葉集』に3首(214、415、553)、『千載集』に4首(407、677、738、904)、『新古今集』に5首(245、256、1161、1380、1389)ある。

8) 今井正「古代和歌における戀と夢」(『宇部國文研究』11、宇部短大國語國文學會、1980. 3)p.8。

9) その他『後撰集』には「春の夜の夢の中にも思きや君なき宿をゆきて見むとは」(慶賀・哀傷-1387、忠平)があり、『拾遺集』から『詞花集』にかけては見られず、『千載集』に2首(964、965)、『新古今集』に10首(38、106、112、790、1160、1177、1178、1382、1383、1385)ある。

よみ人しらず)は、春の夜の夢に見た逢瀬を現実のものにしたいと願った歌で、「まどろまぬ壁にも人を見つる哉まさしから南春の夜の夢」(戀1-509、駿河)も、夢に見た逢瀬が現実の逢瀬になって欲しいと詠んだ歌である。何れも春の夜の夢が現になることを期待しており、「和歌では春の夜の夢は正夢といわれるようになるが、それはこれらの歌に據る」<sup>10)</sup>ものと思われる。

「見はてぬ夢」は、戀への未練を表現する慣用語であった。『古今集』には1首だけあり、忠岑は「いのちにもまさりておしくある物は見はてぬ夢の覺むるなりけり」(戀2-609)と、戀人との逢瀬の夢を見終わらないうちに目覺めてしまったことを惜しんでいる。この歌は『忠岑集』の詞書に「むかしものなどいひはべりしをんなの、なくなりにしが、あか月がたにゆめにみえはべりしかば」<sup>11)</sup>とあり、既に情を交わした亡き戀人の夢を見たことになる。従ってまだ逢うに至らない段階の戀歌を並べた戀2の歌としては相応しくなく、哀傷の部にでも入れるべき歌である。だが作者の忠岑は『古今集』の撰者でもあったわけだから、このことを承知していたのであろう。また『後撰集』にも1首だけあり<sup>12)</sup>、「よそながら思しよりも夏の夜の見はてぬ夢ぞはかなかりける」(夏-171、よみ人しらず)と、夏の夜の見終わらないうちに覺めてしまう夢のような逢瀬への未練が詠まれている。

「夢路」は『古今集』に7首、『後撰集』に8首あり<sup>13)</sup>、小町は「かぎりなき思ひのままに夜も來む夢路をさへに人はとがめじ」(戀3-657)と、「ゆめちには足もやすめず通へども現にひとめ見しごとはあらず」(戀3-658)の2首の夢路を詠んでいる。「戀ひて寝る夢地にかよふたましひの馴るるかひなくうとき君哉」(『後撰集』戀4-868、よみ人知らず)とあるように、夢路を通して魂が行き來するわけであるが、小町の最初の歌では誰の魂が夢路を通うのかについて解釋が分れている。作者の魂とする説(窪田空穂、大系、集成、全集、新編全集など)と、相手の魂とする説(新大系)があるが、多くの注釋書は前説をとっている。

また貫之の歌「夢路にも露やをくらん夜もすがら通へる袖のひちてかはかぬ」(『古今集』戀2-574)のように、しばしば夢路と「露」を結び付けて、袖の涙を夢路に置かれた露のせいに行っているが、これは「夢路を通う途中をリアルに表現する工夫」<sup>14)</sup>だと言えよう。その他「戀ふれども逢ふ夜なき身は忘草夢地にさへや生ひ繁るらん」(『後撰集』戀6-1060、よみ人しらず)のように、夢路と「忘れ草」とを結び付け、夢にも逢えない理由を夢路に生えている忘れ草のせいにする歌もある<sup>15)</sup>。なお夢路には「夢の通ひち」(559)と詳しく言ったり、最短コースの「夢の直路」(558)などの表現も用いられた。

第二に夢を見る人と見られる人との関係であるが、『万葉集』では三つのパターンがあった。第一に相手が思っているから相手が自分の夢に現れるというパターンで、娘子が湯原王に贈った歌「我が背子がかく戀ふれこそぬばたまの夢に見えつつ寝ねらえずけれ」(4-639)などがある。第二に自分が思っているから相手が自分の夢に現れるというパターンで、中臣宅守の歌「思ひつつ寝ればかもとなぬばたまの一夜も落ちず夢にし見ゆる」(15-3738)などがある。第三に自分が思っているから自分が

10) 新注八代集『後撰和歌集』(和泉書院、1992)の頭注。

11) 『新編國歌大觀3 私家集編I』角川書店、p.38

12) 他の八代集には『新古今集』に2首(445、1326)ある。

13) 『古今集』524、558(夢の直路)、559(夢の通ひち)、574、657、658、766、『後撰集』296、559、620、711、770、868、1039、1060。他の八代集には『後拾遺集』1首(601)、『詞花集』1首(193)、『千載集』1首(677)、『新古今集』4首(447、981、1315、1804)ある。

14) 久豊木原玲「夢歌の位相 小野小町以前・以後」(『万葉への文學史 万葉からの文學史』笠間書院、2001)p. 132。夢路と露が詠まれた歌は他にも『後撰集』に2首(559、770)ある。

15) 『古今集』にも「戀ふれども逢ふ夜なきは忘草ゆめ路にさへや生ひしげるらむ」(戀5-766、よみ人しらず)が1首ある。

相手の夢に現れるというパターンで、これは最初のパターンの裏返しであるが、人麻呂歌集「ぬばたまのその夢にだに見え継げや袖ふる日なく我は戀ふるを」(12-2849)などがある。ところが『古今集』では小町の歌「思つつ寝ればや人の見えつらむ夢としりせば覺めざらましを」(戀2-552)のように、殆んどが自分が思っているから相手が自分の夢に現れるという第二のパターンで詠まれている<sup>16)</sup>。先に述べたように、魂は夢路を通じて行き來するわけであり、『万葉集』では相手の夢と自分の夢の双方方向に行き來していた魂が、『古今集』になると相手の魂が自分の夢にやってくるという、一方向に限定されるようになったと言えよう。

また『後撰集』にも自分が思うから相手が自分の夢にやってくるという發想の歌が多いが、ただ「夢路」の歌に限っては自分が夢路を通して相手を訪れるという歌が3首見られる<sup>17)</sup>。例えば「夢地にも宿貸す人のあらませば寢覺に露は拂はざらまし」(戀3-770、よみ人しらず)は、夢の通り路を通して相手に逢いに行く際に、宿を貸してくれる人があったならば露に濡れなくてすんだのにと意である。

第三に夢の頼りなさが多く詠まれるようになるという点である。『万葉集』にも家持の歌「ぬばたまの夢にはもとな相見れど直にあらねば戀止まずけり」(17-3980)のように、現實と比べて夢の頼りなさを詠んだ歌が散見されたが、『古今集』になると更にその傾向が強くなる。例えば深養父の「うばたまの夢に何かはなぐさまむ現にだにも飽かぬ心を」(物名-449)や、敏行の「戀ひわびてうち寝るなかなに行かよふ夢の直路はうつつならなむ」(戀2-558)、小町の「ゆめちには足もやすめず通へども現にひとめ見しごとはあらず」(戀3-658)などでは、夢を見ながらも現ではない故に満ち足りぬ心が詠まれている。

更に『後撰集』になると、単に夢の頼りなさを詠むだけでなく、夢の歌に「はかなし」という語を直接詠み込むようになった<sup>18)</sup>。例えば源たのむは「夢のごとはかなき物はなかりけり何とて人に逢ふと見つらん」(戀3-765)と、最もはかないものとして夢をあげており、よみ人しらずの「時の間の現をしのぶ心こそはかなき夢にまさらざりけれ」(戀3-767)では、夢のはかなさと瞬時の逢瀬のはかなさとが比較されている。

このように夢がはかないものの代表のごとく認識されるようになった結果、はかないものを喩えるのにも夢が用いられるようになった。その代表例が「世の中」の無常を喩えるのに夢が用いられたことである。『古今集』には4首あり、そのうちの3首が哀傷歌である<sup>19)</sup>。紀友則は亡き敏行の遺族に送った弔意の歌で「寝ても見ゆ寝でも見てけり大方はうつせみの世ぞ夢にはありける」(哀傷-833)と、空蟬のようなはかない現世を夢に喩え、また知り合いの死に遭遇した紀貫之は「夢とこそいふべかりけれ世中にうつつある物と思ける哉」(哀傷-834)と、この世を夢と見なし、親しい人が亡くなった時に忠岑も「寝るがうちに見るをのみやは夢といはむはかなき世をも現とは見ず」(哀傷-835)と、はかないこの世は夢であると斷言している。他にもよみ人しらずの「世の中は夢かうつつかうつつも夢

16) なお小町の歌(戀3-657)は作者の魂が夢路を通うと見れば、第三の自分が思っているから自分が相手の夢に現れるというパターンになり、相手の魂が夢路を通うと見れば、第二の自分が思っているから相手が自分の夢に現れるというパターンになる。

17) 『後撰集』559、770、868。

18) 『後撰集』には「はかなし」という語が詠まれた夢の歌が8首(170、171、598、703、765、767、871、878)ある。

19) 和泉式部は「白露も夢もこの世もまぼろしもたとへていへばひさしかりけり」(『後拾遺集』戀4-831)と、はかないものの代表として白露と夢、この世、幻をあげている。なお『後撰集』には世の無常を比喩した夢は見られない。

とも知らずありてなければ」(雑下-942)があるが、この歌は上二句と下二句とが自問自答した形になっており、天台教理の「三諦」(仮諦・空諦・中諦)を詠んだと解釋されたり<sup>20)</sup>、眞言宗や老莊思想などにもある思想なので、一つに限定しないほうがよいと言われたりしている<sup>21)</sup>。

### 3. 『拾遺和歌集』～『千載和歌集』

『古今集』では全体の3.1%詠まれていた夢の歌が、『後撰集』2.5%、『拾遺集』は1.8%、『後拾遺集』1.4%、『金葉集』1.7%、『詞花集』1.4%と次第に減少しており、夢はだんだん忘れられていったと言っても過言ではない。その原因として、先ず「比喩の陳腐化が夢の歌減少の一因」<sup>22)</sup>と考えられる。比喩の夢は『古今集』には2首(644、970)しかなかったのに、『後撰集』でははかない逢瀬の比喩として多用された。例えば「かげろふのほめきつれば夕暮の夢かとのみぞ身をたどりつる」(戀4-856、よみ人しらず)とか、「現には臥せど寝られず起きかへり昨日の夢を何時か忘れん」(戀5-925)などがそうである。このような比喩の多用によって夢は歌語としての新鮮味を次第に喪失していったのであり、その結果、勅撰集への入集も減っていったのであろう<sup>23)</sup>。

夢の歌のうち戀歌が占める比率をみると、『古今集』76%、『後撰集』69%、『拾遺集』67%、『後拾遺集』41%、『金葉集』41%、『詞花集』50%となっており、次第に減少してはいるものの、やはり夢は戀歌の素材として相変わらず詠まれ続けたのである。『拾遺集』以後の戀歌の夢の特徴としては、第一に、夢から覚めて後の心境が表現されており、夢見前よりも夢見後の心情に焦点が移ったことがあげられよう。例えば『拾遺集』には「夢よゆめ戀しき人に逢ひ見すなさめての後にわびしかりけり」(戀2-709、よみ人しらず)と、覚めて後の落胆を危惧して、擬人化した夢に逢瀬の夢を見せないようにと呼び掛けたり、「夢にさへ人のつれなく見えつれば寝ても覚めても物をこそ思へ」(戀4-919、よみ人しらず)と、無情な相手を夢に見て物思いに耽ったりする歌がある。

第二に『古今集』や『後撰集』では戀人同士の魂が行き來する夢の歌は雑部には入集していなかったけれど<sup>24)</sup>、『拾遺集』以降は雑部にも入集するようになったことも特徴と言えよう。例えば『後拾遺集』に「戀しくは夢にも人を見るべきを窓うつ雨に目をさましつつ」(雑-1015、大貳高遠)と、戀しい人をきっと夢の中に見るはずなのに詠んだ歌があり、『金葉集』にも「うたた寝の夢なかりせば別れにし昔の人をまたも見ましや」(雑上-553、顯季)と、うたた寝して別れた人を夢に見ると詠んだ歌がある。このように雑部に戀人同士の靈魂の通いを詠んだ夢の歌が散見しており、このような夢が「戀部

20) かつて金子元臣氏は「想は、天台にいはゆる三諦の理なり。万有の現象、有と觀ずればうつなり。無と觀ずれば夢となり。有の仮諦にあらざ、無の空諦にあらざる實相、これ中諦なり。現とも夢とも知らずば、中諦にあたる。この眞如の妙諦を、三十一字に發展し得たるを、作者の技倆とす。」

(『古今和歌集評釋』明治書院、1902)と、天台教理を詠んだ歌として解釋し、窪田空穂氏(『古今和歌集評釋』東京堂出版、1960)も同様に解釋した。

21) 新潮日本古典集成『古今和歌集』(新潮社、1978)の頭注。

22) 渡辺裕美子「新古今和歌集の夢 -八代集の終結点として-」(『國文』お茶水女子大、1984.7)p.67。

23) なお逢瀬や世の中などを比喩する夢の歌は『拾遺集』に5首(708、733、734、1206、1318)、『後拾遺集』に4首(577、675、879、1188)、『金葉集』に5首(381、445、459、616、630)、『詞花集』に3首(61、261、378)見られる。

24) 『古今集』に「思やる越の白山しらねども一夜も夢にこえぬ夜ぞなき」(雑下-980、紀貫之)があるが、男同士の友情がテーマである。

の抒情表現には適さないと『拾遺集』頃から考えられ始めたこと<sup>25)</sup>を物語っているのであろう。実際に『拾遺集』の時代に成立した『堀河百首』では、「夢」は戀部の題ではなく、雑部二十題のうちの一つとなっている。

ところで『詞花集』で全体の1.4%に落ち込んだ夢の歌が『千載集』になると3.1%と二倍以上に増えた。単に歌数が増えただけではなく、四季歌や雑歌、釋教歌などの戀歌以外の部立にも広く進出したのである。夢は『千載集』において新たに見直され、復活を果たしたと言えよう。その理由としては『千載集』の撰者である俊成によって実践され、後に定家によって確立された「本歌取」の技法が発達したことがあげられよう。例歌として「衣返す」と「うたた寝」を見てみることにする。

つれなくぞ夢にも見ゆるさ夜衣うらみむとは返しやはせし(戀2-700、伊綱)  
 思ひかね夢に見ゆやと返さずは裏さへ袖は濡らさざらまし(戀3-828、頼政)  
 から衣かへしては寝じ夏の夜は夢にもあかで人別れけり(戀4-895、俊恵法師)

3首とも小町の歌「いとせめて戀しき時はむばたまの夜の衣を返してぞ着る」(『古今集』戀2-554)を本歌としている。小町は「衣を裏返して寝ると夢の中で戀人に逢える」という日常的に行われていた夢見の呪術を用いて、戀情を訴える歌を素直に詠んだのであるが、伊綱は、夢の中の戀人は薄情なので恨めしい、このように恨もうとして衣を返したのではないのにと、衣を裏返したことを後悔している。頼政は、夢で戀人に逢おうと衣を返して寝なかったならば袖の裏まで涙で濡らさずにすんだのにと、夢の中でさえ逢えなかったことを嘆いており、俊恵は、夏は夜が短く夢で逢えたとしても満足できないので衣を返して寝ないと、夢見そのものを放棄している。三人とも有名な小町の「衣返す」の夢の歌を意識しつつ、掛詞や縁語などを駆使しながら、より複雑な「衣返す」の世界を新たに詠みあげているのである。

また小町の「うたた寝」の歌を本歌とする歌が2首ある。

うたた寝の夢に逢ひ見てのちよりは人も頼めぬ暮ぞ待たる(戀2-738、源慶法師)  
 うたた寝にはかなく覺めし夢をだにこの世に又は見でややみなむ(戀5-904、相模)

これらは小町の「うたたねに戀しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき(戀2-553)を意識して詠まれた歌である。源慶法師の歌は、うたた寝の夢に戀人と逢ってからというもの夕暮れが待ち遠しくなったという意で、小町の歌と酷似しているが、相模の歌は、うたた寝に見てはかなく覺めてしまった戀人の夢でさえも再び見ることもなくなってしまうのだらうと、小町とは逆に未來を悲觀した歌となっている。

戀歌以外に目を向けると、先ず「雑歌」に12首も入集しているのが際立っている。その数は戀歌の13首にも匹敵する多さである。例えば覺審法師は「過ぎきにし四十の春の夢のよは憂きよりほかの思ひいでぞなき」(雑上-1028)と、はかなく過ぎてしまった四十の春の夢のような過去を顧つつ憂き世を嘆いているし、俊成は「憂き夢はなごりまでこそかなしけれこの世ののちも猶や歎かむ」(雑中-1127)と、現世の夢のような憂き世を嘆きつつ、死後の嘆きまでも予想して詠んでいる。また上西門院兵衛は「これや夢いづれかうつつはかなさを思ひ分かでも過ぎぬべきかな」(雑中-1130)と、夢が現實か

25) 注22の前掲論文、p.69。

定かではない世の中のはかなさを詠嘆している。雑歌の夢はこのような現世のはかなさを詠嘆した無常の歌が殆んどである。

次に「釋教歌」に4首の夢があるのが目につく<sup>26)</sup>。例えば兼實は「人ごとに変るは夢の迷ひにて覺むればをなじ心なりけり」(釋教歌-1223)と、煩惱の迷いを夢に喩え、その迷いの夢から覺めれば皆同じ心であると詠んでいるが、この悟りは詞書から宝生如來の平等性智(全てのものが究極的に平等であること)であることが分かる。また登蓮法師は「おどろかぬ我心こそ憂かりければかなき世をば夢と見ながら」(釋教歌-1235)と、無常のこの世を夢と見ながらも、迷いの夢から目覺めることのない自分の愚かしさを述懐している。

このように釋教歌では煩惱の迷いを夢に喩え、夢は覺めるものという認識のもとに、煩惱の迷いから覺めることのない愚かしさを嘆いたり、夢のような迷いから解脱した悟りの境地を表現しているのである。『千載集』が成立した平安末期は保元、平治の亂など相繼ぐ戦亂に人々は人生の無常を痛感するようになり、その結果、更に仏道への關心が高まった。「歌會や歌合の席でも法華經はいうまでもなく、淨土三部經、華嚴經、般若心經、維摩經などの經文の一節も題として歌を詠むことなどが流行した」<sup>27)</sup>。『千載集』において釋教歌が部立として獨立したのはこのような時代背景によるものである。

最後に、春1首、夏2首、冬2首と、「四季歌」に夢の歌が5首あるのも特色と言えよう。例えば崇徳院御製の「あさゆふに花まつころは思ひ寝の夢のうちぞさきはじめける」(春上-41)は、櫻を待ち焦がれて寝たので夢の中で櫻が開花したという意で、夢の中で櫻が咲くという幻想的な美意識が感じられる。このような幻想的な夢の四季歌は次の『新古今集』に至って完成したと言えよう。

また藤原公衡の「をりしもあれはなたち花のかをる哉むかしを見つるゆめの枕に」(夏-175)は、昔の戀の夢を見ていた枕の辺りに花橘が薫ってきて、いっそう懐旧の情が募ったという意である。本歌は『古今集』の「さつきまつ花たちはなの香をかげば昔の人の袖の香ぞする」(夏-139、よみ人しらず)であり、「花橘の香」は昔の戀人の袖の香を連想させるもの、即ち昔を偲ぶ契機となっている。このような懐旧的な艶なる情調が公衡の歌に投影しており、後の『新古今集』の式子内親王の歌(夏-240)や俊成女の歌(夏-245)などでは更に深まった情調が詠まれるようになる。

元來『千載集』は勅撰集初出歌人の多い歌集であるが、夢の歌も例外ではない。例歌としてあげた12人を見てみると、伊綱、源慶法師、覺審法師、兼實、公衡は『千載集』初出、頼政、俊恵法師、俊成、登蓮法師、崇徳院は『詞花集』初出、上西門院兵衛は『金葉集』初出、相模は『後拾遺集』初出である。もちろん各勅撰集の初出歌人は必ずしも成立時の現役歌人とは限らないけれど、『千載集』の夢の歌は比較的新しい歌人を中心としていると言うことはできよう。

## 4. 『新古今和歌集』

源平の兵亂と承久の動亂との間隙にあって一時の小康を取り戻した貴族たちは後鳥羽院を中心とし

26) 八代集では、先ず『拾遺集』の「哀傷」に釈教歌が収められ、『後拾遺集』では「雑6」の中に「神祇」の次に「釈教」の小部立が勅撰集としては初めて設けられたが、夢の歌は『後拾遺集』(雑6-1188、僧都覺超)1首だけである。

27) 糸賀きみ江「千載集和歌集の考察 -歌材「夢」の視点から-」(『講座平安文学論究』3、風間書房、1986)p.119。

て王政復古の夢を燃え上がらせた。その頃成立した『新古今集』は夢の歌が急増し(79首)、比率(4.0%)も八代集の中で一番高い。夢の歌は戀部(29首、37%)において一步後退した反面、四季部(18首、23%)に多数進出した。單に「數量的に多いというだけでなく、それらは質的にも新古今的な夢の特性をもっとも端的にあらわすもの」<sup>28)</sup>となっている。

春の歌は4首あるが、例えば『新古今集』の歌風である妖艶美を代表する定家の「春の夜の夢のうき橋とだえては峰にわかる横雲の空」(春上-38)もその一つである。定家は夢の浮き橋が途絶えてしまった後も、完全に現の世界に戻ったわけではなく、夢の余情に浸っている。また俊成女は「風かよふねぎめの袖の花の香にかほる枕の春の夜の夢」(春下-112)と、袖や枕に薫る櫻の香に春の夜に見た夢の余韻を感じた歌を詠んでいる。櫻の花の香と春の夜の夢の甘美な余情とを融合させて、優艶な雰囲気醸し出している。更に家隆は「さくら花夢かうつつか白雲のたえてつねなき峰の春風」(春下-139)と、夢か現か分からないが櫻の花と思った白雲は消え去り、無常を誘う春風ばかり吹いているという歌を詠んだが、これは『古今集』の2首(戀2-601、雜下-942)を本歌としている。戀人の無情(601)や、世の中の無常(942)を詠んだ本歌の心を、夢現のうちに春風にはかなく散った櫻花の景を通して具体化していると言えよう。

このように春の夢の歌は、夢と現実が交錯する幻想的な意識の中で、『新古今集』獨特の甘美で妖艶な美的世界を表現しており、そのような世界を展開させるのには四季のうちで春が最適だったのであろう。

夏の歌も4首あるが、その中の2首で「橘」が詠まれており、その結果、懐旧の情と結び付いた夢となっている。

かへりこぬ昔をいまと思ひねの夢の枕にほふたちばな(夏-240、式子内親王)  
たちばなのほふあたりのうたたねは夢も昔の袖の香ぞする(夏-245、俊成女)

式子内親王の歌は、昔のことを思いながら寝て見た夢から覺めると、枕辺に橘が匂っているという意で、夢の中では戀人の香りだと思っていたのに、覺めてみると實は橘の匂いであったというわけである。また俊成女の歌は、先に述べた公衡の歌(『千載集』夏-175)と同じく、『古今集』の歌(夏-139、よみ人しらず)を本歌としており、橘の匂う辺りでうたた寝をすると、夢の中までも昔の人の袖の香りがするという意である。目覺めている時にも夢を見ている時にも昔の人の袖の香りがして、夢と現が交錯した幻想的な歌となっている。

秋の歌は5首あり、何れも夢から覺めた後の余韻が詠み込まれている。例えば慈円の歌「なく鹿の聲にめざめてしのぶかな見はてぬ夢の秋の思を」(秋下-445)は、鹿の鳴き聲に目が覺めて、見終わらなかった夢の中の秋の悲しい思いを偲んでいるという夢で、『古今集』の2首(秋上-214、戀2-609)を本歌としている。妻を戀して哀切に鳴く牡鹿の聲は夢の内容が悲しいものであったことを暗示している。また式子内親王の歌「ちたびうつ砧のをとに夢さめてものおもふ袖の露ぞくだくる」(秋下-484)は、砧の音で夢から覺めて、物思いをしている袖の涙の露が碎け散るという意で、砧の音は夢にまで入り込み、目覺めた作者は袖にこぼれる涙が砧によって碎かれた露のようだと感じたのである。

秋は夜長であり、鹿の聲や砧の音にも目覺めやすく、覺めた後にも長く侘しい夜が続く。その結

28) 鹿内和子「和歌における夢について-万葉集～八代集-」(『女子大國文』京都女子大學國文學會、1971.10)  
p.32

果、秋の夢の歌に夢から覺めた後の物悲しい心情が詠まれるようになったのであろう。

冬の歌も5首あり、寒夜の夢見後の侘しさが詠まれている。例えば有家の歌「夢かよふ道さへたえぬ吳竹のふしみの里の雪のしたをれ」(冬-673)は、伏見の里の吳竹が雪に下折れる音で現の道はもとより夢の通り路さえも途絶えてしまったという意であり、夢から覺めた後の哀れな余韻が詠まれている。また良経の歌「かたしきの袖の水もむすばほれとけて寝ぬ夜の夢ぞみじかき」(冬-635)は、獨り寝の袖には涙の水も結び、そのためにうち解けて寝ることもできず、長い冬の夜も夢ばかりは短いという意で、寒い冬の獨り寝の侘しさが優艶に詠まれている。

このように『新古今集』では、自然に對する鋭敏な感覺を持った歌人たちにより、夢は四季折々の季節感に応じて繊細に捉えられており、ここに至って幻想的な美的な象徴にまで昇華しえたと言えよう。『万葉集』以來、夢は主に男女の情の世界を詠む戀歌の素材であったが、『新古今集』では、夢が情の世界を越えた美的な象徴となったため、戀歌の比率は『古今集』(76%)や『後撰集』(69%)ほど高くはない。しかし、やはり夢と戀とは切り放せなかったようで、夢の歌の35%以上は戀歌である。そこにも幾つかの特徴が見い出せる。

第一に、先に『拾遺集』以後の戀歌の夢の特徴として夢見前よりも夢見後の心情に焦点が移ったことがあげたが、『新古今集』では、逢瀬の夢を見た後の物思いを詠んだ歌が多く見られる。例えば俊成女の歌「露はらふ寝覺めは秋のむかしにて見はてぬ夢にのこるおもかげ」(戀4-1326)は、涙の露を拂っている悲しい秋の寝覺めは、戀人に飽きられて悲しんだ昔の秋と変わらず、今しがた見果てずに覺めた夢に残っている戀人の面影よという意である。この歌には本歌が2首あって、『古今集』の忠岑の歌「いのちにもまさりておしくある物は見はてぬ夢の覺むるなりけり」(戀2-609)と、『後撰集』の「涙河流す寝覺もある物を拂ふ許の露や何なり」(戀3-771、よみ人しらず)である。前者は戀人との逢瀬の夢を見終わらないうちに目覺めてしまった残念さを、後者は涙を河のように流して寝覺める侘しい心情を詠んでおり、何れも自分の心情を直接的に表現しただけの歌である。だが俊成女の歌は「露はらふ寝覺めは秋」という客觀的な描寫が戀人に飽きられてしまった侘しさを表現し、かつ「見はてぬ夢」がはかなく消えた昔の戀を美的かつ象徴的に表現しており、2首の本歌とは大きな隔たりがあると言えよう。

また實定の歌「さめてのち夢なりけりと思ふにも逢ふは名残のをしくやはあらぬ」(戀2-1125)は、覺めた後に夢だったと思うにつけ、戀人と逢うということは名残惜しいことであるという意で、夢で戀人と逢った後の名残惜しさを強調しつつ、現實の逢瀬後の名残惜しさを反語的に強調しているのである。この歌も俊成女の歌と同じく忠岑の歌(戀2-609)を意識して詠んだものと思われる。

第二に、夢の歌は戀1には1首もなく、戀3と戀5に多く詠まれているが、戀部の配列は戀の進行に沿っており(但し『後撰集』は例外)、夢は戀

としてはかなり進んだ段階において多く詠まれたということである。しかも単に歌数が多いだけではなく、戀3(1157~1162)と、戀5(1380

|     | 戀1 | 戀2 | 戀3 | 戀4 | 戀5 |
|-----|----|----|----|----|----|
| 古今  | 5  | 9  | 8  | 1  | 3  |
| 新古今 | 0  | 4  | 9  | 5  | 11 |

~1391)の二カ所において連続的に入集している。例えば戀3には、忍ぶ仲の戀を相手に口止めする歌が3首(1159、1160、1161)續けて並んでいるが、伊勢の歌「夢とても人にかたるな知るといへば手枕ならぬ枕だにせず」(戀3-1159)は、たとえ夢で見たこととしても人に語ってくれるな、枕は秘密を知るので手枕でない枕さえもしないという意で、夢に見たことを誰かに語ればその人への戀が露見してしまうので、相手に口止めをしている。

また戀5には、逢瀬の夢から目覺めて余韻に浸ったり、現での逢瀬後の夢のような心情を表した

り、逢瀬そのものを夢に喩えたりした歌が見られる。例えば寂蓮法師の歌「涙河身もうきぬべき寢覺めかなはかなき夢のなごりばかりに」(戀5-1386)は、激しく流れる涙河に身も浮いてしまいそうな寢覺めであるよ、はかない戀の夢の名残りだけでという意で、作者は夢の逢瀬の激しく甘美的な余韻にしばし浸っているのである。一方、俊成女の歌「夢かよ見し面影もちぎりしも忘れずながらうつつならねば」(戀5-1391)は、戀人の面影を見たことも、契りを交わしたことも夢だったのか、忘れられないけれど現実とは思われないからという意である。この歌は詞書に「遭不レ逢戀の心を」とあるように、一度逢ったきり逢うことなく、かえって一層思いが増すという題で詠まれた歌であり、時とともに昔の逢瀬を夢かと疑うようになっていったのである。また俊成の歌「あはれなりうたたねにのみ見し夢の長き思ひにむすほはれなん」(戀5-1389)は、あわれなことだ、うたた寝に見た夢のような逢瀬をこれから長く思い悩むことであろうという意で、うたた寝に見た夢は短くはかなかった戀人との契りを暗示している。

このように「逢わぬ戀」や「忍ぶ戀」の段階の歌が多かった『古今集』とは異なり、『新古今集』では戀の終末期や終了後に夢の歌が多く入首している。即ち、まだ逢っていない人や忍ぶ仲の戀人との未来の逢瀬を願って詠んだ『古今集』の夢の歌に對して、『新古今集』には逢瀬の後の心情を吐露したり、昔の逢瀬を振り返ったりするなど、過ぎ去った昔を回想して詠んだ歌が多いのである<sup>29)</sup>。

そこには貴族社會の崩壊によって、現實逃避的、空想的になった時代精神からの影響が考えられよう。何故なら『新古今集』は現實世界に夢を見い出せなかった貴族たちが、華やかだった王政への復古の夢を燃え上がらせていた頃に成立した作品だからである。また戀4には源通具の歌「いま來んと契しことは夢ながら見し夜ににたる有あけの月」(戀4-1276)や、源通親の歌「あひ見しは昔語りのうつつにてそのかねことを夢になせとや」(戀4-1299)のように、過去のはかない約束を夢と見なす歌がある。2首とも男性が女の心で詠んだ歌で、夢のようにはかなく消えた男の約束を恨んでおり、夢が過去と結び付くという点では戀5と通じていると言えよう。

第三に「春の夜の夢」が多く詠まれているという点である。先にも述べたように春の夜の夢は短くはかないことの喩えとして、見た夢が實現することを期待して詠まれた。八代集では『後撰集』に3首、『千載集』に2首入集したが、『新古今集』には10首(38、106、112、790、1160、1177、1178、1382、1383、1385)も入集し、そのうち6首までが戀歌となっている。

例えば伊勢の歌「春の夜の夢にありつと見えつれば思ひたえにし人ぞ待たるる」(戀5-1382)や、盛明親王の歌「春の夜の夢のしるしはつらくとも見しばかりだにあらば頼まん」(戀5-1383)は、春の夜の夢の實現を期待して詠まれている。兩者とも当代の歌人ではなく、『古今集』や『後撰集』時代の人だったことにもよるだろうが、戀歌として入集した春の夜の夢は『後撰集』以來の伝統を受け継いでいると言えよう。

ところが春の歌として入集した春の夜の夢の歌は、先に述べた定家の歌「春の夜の夢のうき橋とだえして峰にわかるる横雲の空」(春上-38)や、俊成女の歌「風かよふねざめの袖の花の香にかほる枕の春の夜の夢」(春下-112)のように、夢と現、景物と心情が渾然一体となった境地が詠まれている。このような幻想的な美意識によってとらえられた春の夜の夢は、妖艶なはかなさの象徴として詠まれており、戀歌として入集した春の夜の夢とはかなり趣きが異なっている。

29) 渡辺裕美子氏は「『新古今集』の夢は過去へ回歸する手段なのである」と述べている。(注22の前掲論文、p.72)

## 5. おわりに

以上、八代集に入集した夢の歌について、その夢の特徴や、歌人たちの夢に対する意識などの変遷を通覧した結果、次のことが分かった。

『万葉集』では実際に見る具体的な夢が詠まれていたが、『古今集』になると観念化・情趣化した夢が詠まれるようになった。その結果、慣用的な表現(思ひ寝の夢、うたた寝の夢、春の夜の夢など)が生じたり、空想的に美化されるようになったりした。また夢の頼りなさを詠むようにもなり、特に『後撰集』からは「はかなし」という語を直接夢の歌に詠み込むようになった。更に「世の中」などといった、はかないものを喩えるのにも夢が使われるようになった。

『拾遺集』から『詞花集』にかけては、夢は比喩の多用によって歌語としての新鮮度を次第に喪失してしまい、だんだん忘れられた存在となった。この頃の夢については、魂が往來する夢の歌が戀歌の抒情に適さないと考えるようになったからか、雑部にも入集するようになったことが特徴的である。

一時後退した夢は、『千載集』において四季歌や雑歌、釋教歌など、戀歌以外の部立にも広く進出して、復活を果たした。それは撰者である俊成によって実践された「本歌取」の技法が発達したからで、本歌を意識しつつ掛詞や縁語などを駆使しながら、より複雑な世界を詠みあげた歌が多数入集している。また雑歌の夢は現世のはかなさを詠嘆した無常の歌が殆んどで、『千載集』から独立した部立となった釋教歌では、煩悩の迷いから覚めることのない愚かしさや、迷いから解脱した悟りの境地などが表現されている。

『新古今集』の夢の歌は八代集の中で一番比率(4.0%)が高く、四季部(18首)にも多数進出した。しかも単に歌数が多いだけでなく、四季折々の季節感に応じて繊細に捉えられた夢は幻想的な象徴にまで昇華しており、『新古今集』の歌風を端的に表している。また戀歌の夢は戀3と戀5に多く入集しており、夢は戀のかなり進展した段階において多く詠まれた。内容的には逢瀬の夢を見た後の物思いが詠まれ、「春の夜の夢」という慣用表現が多用された。

本稿では『古今集』(905年)から『新古今集』(1205年)までの約300年にわたる夢の歌(248首)を対象として考察した結果、かなり概略的な考察となってしまったことは否めない。よって各集ごとの詳しい考察は今後の課題としたい。

## 【参考文献】

- ・和歌文學大系(2003)『拾遺和歌集』明治書院、
- ・片桐洋一(1998)『古今和歌集全評釋』講談社、
- ・犬養廉(1996)『後拾遺和歌集新釋』上・下、笠間書院、
- ・新編日本古典文學全集(1994)『古今和歌集』『新古今和歌集』小學館、
- ・藤本一恵(1993)『後拾遺和歌集全釋』上・下、風間書房、1993
- ・和泉古典叢書(1991)『後撰和歌集』『後拾遺和歌集』『詞花和歌集』『千載和歌集』和泉書店、
- ・新日本古典文學大系(1989)『古今和歌集』～『新古今和歌集』岩波書店、

- ・ 久曾神昇(1979)『古今和歌集全譯注』1～4、講談社、
- ・ 新潮日本古典集成(1978)『古今和歌集』『新古今和歌集』新潮社、
- ・ 久保田淳(1976)『新古今和歌集全評釋』1～9、講談社、
- ・ 日本古典文學全集(1971)『古今和歌集』『新古今和歌集』小學館、
- ・ 松田武夫(1968)『新釋古今和歌集』上下、風間書房、
- ・ 『八代集全註』1～3(1960)、有精堂、
- ・ 日本古典文學大系(1958)『古今和歌集』『新古今和歌集』岩波書店、
  
- ・ 西郷信綱(1972)『古代人と夢』平凡社、 p.24
- ・ 久豊木原玲(2001)「夢歌の位相 小野小町以前・以後」(『万葉への文學史 万葉からの文學史』 笠 間 書院、) pp.119-139
- ・ 角田宏子(1990.4)「『小町集』の夢の歌について」(『日本文芸研究』關西學院大學日本文學會、) pp.17-28
- ・ 糸賀きみ江(1986)「千載集和歌集の考察 -歌材「夢」の視点から-」(『講座平安文學論』3、風 間 書 房、) pp.97-123
- ・ 渡辺裕美子(1984.7)「新古今和歌集の夢 -八代集の終結点として-」(『國文』お茶水女子大、) pp.65-77
- ・ 今井正(1980.3)「古代和歌における戀と夢」(『宇部國文研究』11、宇部短大國語國文學會、) pp.1-10
- ・ 今井正1978.1()「古代和歌における夢-万葉、古今、新古今を辿る-」(『宇部短期大學學術報 告』1 4、宇部短大、) pp.13-22
- ・ 鹿内和子(1971.10)「和歌における夢について-万葉集～八代集-」(『女子大國文』京都女子大學 國 文 學會、) pp.22-36
- ・ 大岡信(1970.3)「夢のうたの系譜」(『國文學』學灯社、) pp.46-53

## 要 旨

古代人は夢による神や仏のお告げを求め、夢の予言的な機能を信じて将来を占ったりした。ところが『万葉集』から中古の『古今集』、そして中世の『新古今集』へと時代が推移するにつれて、夢の神秘性は特に和歌の世界において徐々に薄れていった。本稿では、夢の歌が『古今集』から『新古今集』までの八代集を通じて如何に変遷していったか、歌の特徴や歌人たちの夢に対する認識、また時代背景などに注目して考察した。

『万葉集』では実際に見る具体的な夢が詠まれていたが、『古今集』になると観念化・情趣化した夢が詠まれるようになった。また夢の頼りなさを詠むようになり、『後撰集』からは「はかなし」という語を直接夢の歌に詠み込むようになった。更に「世の中」などといった、はかないものを喩えるのにも夢が使われるようになった。

『拾遺集』から『詞花集』にかけては、夢は比喩の多用によって歌語としての新鮮味が次第に喪失し、次第に忘れられた存在となった。しかし『千載集』において四季歌や雑歌、釋教歌など、戀歌以外の部立にも広く進出して、復活を果たした。それは「本歌取」の技法が発達したからである。雑歌の夢は現世のはかなさを詠嘆した無常の歌が殆んどで、釋教歌では煩惱の迷いから覺めることのない愚かしさや、迷いから解脱した悟りの境地などが表現されている。

『新古今集』の夢の歌は八代集の中で一番比率が高く、四季部にも多数進出した。しかも単に歌数が多いだけでなく、四季折々の季節感に応じて繊細に捉えられた夢は幻想的な象徴に昇華しており、『新古今集』の歌風を端的に表している。また戀歌の夢は戀3と戀5に多く入集しており、夢は戀のかなり進展した段階において多く詠まれるようになった。

キーワード：夢、逢瀬、観念化、情趣化、幻想化、本歌取、戀歌、雑歌、釋教歌

투 고 : 2004. 8. 31  
1차 심사 : 2004. 9. 11  
2차 심사 : 2004. 10. 2

住 所 : (336-708) 충남 아산시 탕정면 선문대학교 일어일본학과  
電 話 : 041-530-2427  
E-mail : mula@sunmoon.ac.kr